

数枚つづりの

短編集

カナタムメイ

耳鼻科

「先生にはお世話になりました」

「あら、以前来たかしら？」

先生は不思議な顔をした。年は80後半で、笑うとくしゃっとするが、そうでないときは、りと背筋を伸ばして、私の記憶している先生をほうふつとさせる。

「なにしてんのよ！ないてんじゃないわよ、はいつぎ！」若い時の先生はこんな具合で、僕らの中では怖い先生だった。先生は校医で、定期的に学校に来た。「そこ！列が乱れているわよ」急いで鼻をみる、耳をみる、口の中をみる。

「あんなばばあのとこなんか行かねえよな」

「ああ、俺は、あそこのドラえもんが置いてあるところに行っているぜ」

別の耳鼻科の先生のところはとても混んでいた。

その先生も介護でどこかへ行ってしまった。清楚な顔立ちで、若かった。子供がどんな子かを見抜いて、僕のような弱虫だと、やさしくしてくれた。

その耳鼻科がなくなったころから、僕はずっとずっとしていた鼻炎は消え、耳の鼓膜のへこみも消えた。体が丈夫になったのだ。

私は先生が記憶を探る顔つきをしているときに、

「先生、小学校でお世話になりました」

「ああ、そうでしたか、ははは、」

「先生が怖いのは学校中の噂でしたよ」

「ははは、こわかった？」顔がくしゃっとする。「耳がふさがった感じがして、コーという音がする、そして、それから・・・神経科がどうのこうのって、書いてあるけど」

私が問診票に書いた病名だ。幻聴がメインの病気だった。

「あなたが実際聞こえているのは、本当にそうなのだから、困ったらいつでもいいから来なさい」

耳を調べ、「大丈夫、きれいな耳になっていますよ。たぶん水が入ったかしたんでしょ」

「はい、風呂の水が耳に入ったんです、それから、ふさがった感じがして」

「耳の外に出ているから安心なさい」

くしゃっとした顔をし、私がよろけて立つと、

「あ、気を付けて、耳の中をみた後はバランスが少し取れないことがあるからね。だいじょうぶ？」

「はい」私は帽子をとって、帰り際挨拶をした。心配そうな顔をなさっていた。

先日、咳が止まらなくなって、先生のところへ向かうと、医院のドアには

「体調がすぐれず、しばらく休診をいたします」

白くあかるい空から光の筋のような雨が降りそそいだ生暖かい風が吹いていた。

同級生と会った時、「あの医者の前を通ったんだよ、機械やなんか運び出していたから死んだんじゃないか？あ、あとね、モロキューお願い！」

翌日、私は医院に向かった。看板はあったが、張り紙があり、棺桶のようにドアは閉まっていた

。晴れた秋だった。陽光は、すきとおった琥珀色の光だった。私は引き返し、花屋に寄った。

白百合を一本買った。何も声をかけることができないまま、花を一本ドアの前に供え、頭を下げ、自宅にもどった。

妻が夜、テレビを見ながら声をかけてきた。

「とっこちゃん、中耳炎だって、ひどく痛がっていたわ」

私は、テレビをぼんやり見て、返事をしなかったようで、

「ねえ、聞いているのよ、聞こえないの？」

「ああ、ぼうっとしていた、ごめん、ごめん、耳鼻科かい？」

「そう、いい耳鼻科があったら教えてくれる？って言っていた。引っ越して間もないでしょ、とっこちゃんの家」

「ああ、ないねえ」

「ねえ、私、お仕事をして、大変疲れてますの、少し横になってきますわ、ご主人さま」

妻が寝室のドアを乱暴に閉めた。

「本当だ、本当にないだ。もう」私は、そう呟いた。

黒い太陽の塔。

私が起きた時代は間違っていないし、これから出かける会社もきちんと時間はあっている。しかし、何かがおかしい。私が妻に見送られて家を出る際に、渡された靴ペラには黒い太陽のマークが入り、妻のエプロンには、小さな黒い太陽のマークの入るバッチがついている。ドアを開け、自宅を後にして、駅までを歩いていくが、行きかう人が皆服の襟や肩口に黒い太陽のバッチを付けているのだ。それだけではない、みな私が通る際にこそこそを顔を見て話をしている。顔見知りの奥さんは先日犬をなくしたので、つかづいてお悔やみを言おうと思ったら、逃げてしまった。駅に付いてもバッチだらけだ。駅員の帽子のマークも黒い太陽だ。駅で列車を待った。もちろんラッシュアワーなので、電車はひっきりなしに来る。電車に乗ると、広告がすべて例のマークだらけで、車内放送は知らない言語で話をしている。電車が揺れると、一人のサラリーマンが崩れてきた。しかし、謝るところか、意味不明な言語で抗議をされた。会社についた。

「ああ、ああ、あの、そのですね、バッチがないですよ」と同僚が話をかけてきた。

「なんだね、バッチとは」

これですよとスーツの襟を見せる。

「聞こうと思うのだが、それは皆付けていて、私だけが付けていない、何なんだね、それは」

「この国にいる人間の証明みたいなものですよ」

「紛失したらしいのだが、」と、とっさに出まかせを言う。「どこで再交付してくれるだろうか」

社内がざわついた。誰かが通報したらしい、黒づくめの制服警官がこちらに向かってくる。全く知らない言葉で話をして、社員が指をさしながら、警官は私に向かってくる。警官は、目の前に立ちはだかり、奇妙な言語を話して、「xxさんですね、署に来てください。通報がありました。」

「何の通報です？私は悪いことをしていませんよ」

警官は警棒を抜き、私の頭をなぞって、襟元に警棒を置き、顎をその警棒で持ち上げた。

「バッチがないって言っているんだよ、理屈こねないことだね。さ、来るんだ」
皆が連行される私を見て、手を叩いていた。無意識に私はうなだれた。警察に連れて行かれるのかと思うが、パトカーが都会から離れていった。

「どこへ向かうのですか？」と冷や汗を拭きながら、尋ね、「これは警察への方向ではないですよ」と訴えた。

警官は私の頭をさすり、「警察に行くんですよ」と笑顔で答えた。
黒い森だ。緑ではない、樹木が黒い色をしていて、そこに銀色の奇怪な門扉があり、パトカーはそこへ入っていった。

「さ、降りるんだ。」
私は見知らぬ、建物へ連れて行かれた。足がもつれた。廃校になった校舎のようでもあり、潰れた病院のような建物だった。一つの個室に脇を抱えられ入ると、そこには背広を着た男が二人いた。一人は書記らしく、斜めの机に陣取り、紙を前にして、鉛筆を転がしている。もう一人は、尋問官のようで、ほほ笑んでいる。

「座ってください。」
住所、年齢、名前、を告げられた。「間違いないですね？」と書類から目をあげる。
「ええ、その通りです。しかし、そのバッチがないのは知らないんです。それはどこでももらえるんですか？」
「いいですか、お菓子じゃないんです。持ってなくてははいけません。これから、あなたには監視がつきます。何か妙なことをしたら、連行され長い間牢屋に入れられます。」

「そんな無茶な、法律が変わったんですか？」

「法律は変わりません。全く変わっていませんとも！」

書記が、プリントアウトした書類を尋問官に渡した。尋問官は印とサインをし、書記に渡すと、書記は席を離れ、部屋から出て行った。

すると、誰もいない部屋で、尋問官は、顔を近づけてきた。

「ここだけの話だがね、バッチを手に入れることができる。」そして、ポケットから地図を出し、「早くしまいなさい、そこへ行けば再交付してくれるから」

そして、私は解放されたが、自宅の庭には、常に監視役の男がいて、それがきちんとした身なりをしていないから、いたずらしに来た変質者のように見えて、うっとおしいのだ。

寝室に早めに向かった。妻がどこかへ電話を掛けるこもった声がある、そして、庭の窓があき、妻が監視役を接待している。

次の日監視役が監視しているのを承知で、私は尋問官の教えてくれた場所へ赴き、再交付をしてもらおうとした。電車で郊外に出た。ガスタンク工場のさらに奥にこんもりとした廃墟があった。そこに塔が煙突のように伸びていた。塔のはるか上に穴があり、そこに誰かがいるみたいだ。その場所まで、朽ちた梯子を何十メートルも昇らなくてはならない。中間まで行ける自信がない。後ろで、監視役が笑い声をあげ、写真を撮りだした。仕方なく私は、梯子の一段目に足をかけた。

傘男

電話のベルが鳴った。夜中の二時だった。隣で妻が寝返りを打つ。私は受話器を取った。

頭がまだ夢のかけらで整理されていない。

「はい？どちらさん？」

「・・・」

「もしもし！」

「明日行くから」電話がいきなり切れた。寝ぼけた声で、隣の妻が「誰？こんな遅くに」と不機嫌そうに言った。翌朝、雨だった。出社するので、ビニール傘を広げてアパートから出た。出口の前を小学生が雨粒を散らしながら走っていく。その向こうの電信柱の前に、黒い大きなこうもり傘をさし、顔を隠した黒づくめの男がじっとこっちを向いている。顔は一切見えない。電車に乗ろうとして、駅前で新聞を買った時も、こうもり傘の男は遠巻きにして見ている。電車に揺られて二時間かかる。あともう少しでマイホームが手に入る。先ほどの傘の男が次の駅のプラットフォームに立っていた。会社に着き、机に手の平を広げた。汗でびしょりだった。コーヒーを取りに席を立つ、そのとき電話が鳴った。

「はい」

「帰りも待っている」

「あんた、誰なんだ？」電話が切れた。コーヒを飲みに行くと、休憩している連中が顔を覗き込む。「汗ただだよ？何か体調が悪いのか？」「いいや、大丈夫だよ」皆の携帯電話が一斉に鳴った。私は周りをぐるりと見つめると、彼らは私の顔をちらっと見てから、体をよじり、電話口

を掌で囲って、内密な電話を受ける格好をした。私は、自分の席に戻った。帰宅するまで、私は気分が悪くなり、目が回ってきた。熱を測ると、ひどい熱だった。引き出しから解熱鎮痛剤を出し、飲んだ。どうにかその日を過ごした。

帰宅時には雨はやんでいた。しかし、こうもり傘の男は、必ず駅のプラットフォームに立っていた。駅を降りて、自宅に向かった。向こうから、自転車が来た。私の顔をわざとライトを調節して照らすので、眩しく目を細めた。どこかで見た顔だった。

ノックをした。「開けるよ」。合図だ。妻が以前付きまとわれたことがあり、今はこの変わった合図で、ドアを開くことになっている。妻が台所から歩いてきた。ドアが開いた。

「あら、今出て行ったじゃない、私の自転車を借りて」

「え？今帰ったんだ、たった今」

「じゃ、奥の部屋にいた人誰？」

「少なくとも僕じゃない」

その妻の背後には、6畳の部屋がある。妻によるとそこで着替えたのは、私だというのだ。妻をじっと見ていた。すると、その背後に黒いこうもり傘の端が伸びてきた。体の力が抜けて私は意識を失った。あとは覚えていない。

病院で、目が覚めると、妻が心配そうに見つめていた。「あなた少し疲れ切っているのよ。知らせに行くわ」妻が出て行った。病室は個室ではないが、私以外誰もいなかった。そして、私は開きっぱなしの病室のドアを見ていた。外で雨音がした。私は振り向いて、夜の空を窓越しに見ると部屋が反射して窓に映っている。雨粒が窓ガラスに当たる。その向こうに病室のドアが映っている。予感の通り、ドアに黒いこうもり傘の男が立っている。怖くて振り向けない。ガラスに映った傘は病室に入ってくる。全身が脂汗で濡れている。目を閉じた。傘の骨の先が耳にこすれると同時に冷たい雨粒が耳たぶに滴り落ちた。ひゃ！と声をあげ、私はいそいで振り向いて、外にむかって走り出した。「どうしました！」と看護師の声がする。エレベーターのボタンを夢中で押し続けた。何度も押し続けた。足音が近づいてくる。天井と床がひっくり返った。

眩しい光の中、私の顔を医師が覗き込んでいる。「二度失神してますね。何か見えますか？」「ええ、こうもり傘の男です。」「何か言うのですか」「いいえ」「では、しばらく入院されて、様子を見ましょう」妻が笑顔で「よかったじゃない」と言った。私は医師にすぎるように言った。「死神って信じますか」医師は笑って、「空想の産物ですよ」と言った。しかし私の視線の先には、先ほどから病室の隅でこうもり傘の男がこちらを見ている。

記憶

私たち夫婦は結婚をしてから、今年で妻は還暦間近、私は還暦を過ぎた。この年くらいになると、話題の違い、見るテレビの違い、妻は旅行へ行きたがる一方、私は自宅で本を読んでいたと思い、ちぐはぐな関係になる。そんな関係も会話が減り、時間だけが過ぎていくリビングで、私はテレビ、妻は編み物教室で遅くなるとなれば、夫婦と言えるのだろうかと思ったりする。

妻は、先ほどから二階に上がったまま降りてこない。もうじき昼飯だ。だんだんイライラしてきた。妻は何でもやるのが遅い。しびれを切らした私が二階に行こうとすると、妻が、あなた早く来て！と言った。おっくうだ。そうぼやくと、私は二階に上がった。案の定物が散らかっている。

「それだから時間がかかるんだよ。」

「ごめんなさい。でも、これを見て。」

小さな木の箱だった。

「何だ？」

「一樹のへその緒よ。」

「一樹は連絡も手紙も寄こさなくなった。」

「仕事が忙しいからでしょ。それから、これを見て」

古い、時代遅れの私のジャケットだった。

「もう大昔で着られないはずだ。捨てていいよ。」

妻が残念そうな顔をして、ジャケットをしまった。

数日後、妻が突然そのジャケットを持って、着てみて、と言ってきかない。しびしび腕を通すと、着られた。出かけようと言い出した。

電車に乗って二時間かかる海岸だという。妻はいったい何を考えているのだろうか？

私たちは海岸に出て、浜辺を歩き続けた。いったい何の意味があるのだろうか。微笑んで妻は海岸を歩いている。沖合ではウインドサーフィンをしていた。

「あなたこれ、覚えている？」

と、妻は桃色の桜貝を掌に乗せて見せた。

「どうしたんだ？」

「ひどいわね。あなたがくれたじゃない。この海岸で。」

「そうか。」

鳥が間をおいて飛んでいった。私たちは無言で歩き続けた。

「たしか・・・あった。」

私は、古いジャケットのポケットを探った。出てきた。

「そう、それよ。」

「巻貝だ、白い巻貝だ。きみがくれたものだ」

「そのあとを覚えてるかしら？」

「言わせるなよ。」

妻が手を差し伸べた。私は、軽く握ると、彼女は強く握り返した。当時の海岸の風景が浮かんだ。

「金がなかったな...」

「みんな同じだったわよ。」

海岸沿いを、私と妻は長いこと歩いた。当時あった喫茶店が、海に面して建っていた。内装が変わっていた。客は一人もいない。私は妻から大切な思い出をプレゼントされ、そこで白ワインを頼んだ。すこしすると、店員が二つグラスを持ってきた。

「ありがとう。」

誰に言ったのか少し迷ったが、妻を見ると、笑顔で頷いていた。

過去

警備室から出た私は深夜のビルをいつもどおりに巡回していた。常夜灯の前に何かが落ちている。カードであった。《部長ニューヨーク栄転おめでとうございます。》落し物として処理するため、休憩室に持ち帰ることになる。巡回を終え、カードを休憩室の保存ケースに日時と階数を書き添えて入れた。名残惜しかった。しばらく机の上の書類の束を見つめていた。それは、日誌であったが、違うもののように見えた。

「あれ、お前、同窓会は欠席じゃないの？嫌いだろ、勉強できない俺たちのこと」

私は否定をして笑った。女と同級生も、

「よく見下している感じが漂っていたもん」

「生き方変えたのか？」

私は、夏の鍋の辛さで汗をかいてビールを多く飲んでいた。

「こっぴどくやられたんだ」

ざまあみろといった笑いが膨れて私を押ししてきた。

「返す言葉もない。何も知らなかったんだ」

酔った勢いで、私に語る知らない同級生がいた。

「な、この鍋を見てごらん、夏に辛い鍋にしてあるんだ。何でも突っ込んで、煮て、食べやすく、有用にしてしまう、それが鍋だ。何かに似てやしまいか。早く帰んな、うすぎたねえ学者さん。」

私は詫びを入れ、立ち上がると、他から声がかかって、

「まだいなよ、これから二次会、行こうよ、行こう」

「また、呼んでよ、今警備の仕事をしてるんだ、都合はつきやすいんだ。」

先ほどの答えはおそらく社会と教育だろう。そんなことはわかっていた。そうしたことを一切やめようと決めたんだ。挫折なんかじゃない。

鉄パイプが散乱している中に、学生の頃の友人は死んでいた。いまの鍋と同じたとえを使って、

「俺たちは生き方を間違えている気がしてならないんだ」と語ったり、

「ドロップ・アウトした人間に殺されれば文句はない」と望んだりした。

だんだん友人の考えは理解しにくくなっていった。警察の話では、友人のほうから、集団を挑発して襲われて死亡したため、自殺みたいなものだと言われた。

今でも、私は、ゆがんだ遺体にすがりつく母親の泣き声と姿が夢に出る。

冬になり、私がビルの周囲の点検をして回ったのが、夜の十時前であった。人通りも少なくなった国道の歩道、その向こうから塾帰りの子供だろうか、バッグを背負って、歩いてきた。しばらく様子を見てみると、顔が見えるほどになって、ビル前の街灯で青白く光るすべりやすい道をよろけて傾いてきた。私は支えて、

「えらいな、こんな時間までお勉強か？ここ、滑りやすいから、気をつけて」

子供は、私の手を振りほどくと、ふらついて、上目づかいで、刃物で刺すように言い放った。

「あぶねえな、てめえ」

私はまるで過去から吹き込んできた寒気が背中を上ってきたように感じた。子供はそのまま通り

過ぎ、どんどん進んでいった。しばらくその後ろ姿を見ていたが、怒りや失望の感情は一切なかった。少し時間が空いている。コンビニへ夜食を買いに向かった。

ビルの地下にある休憩室で私が夜食を食べ始めると、仮眠室の二段ベッドの暗がりから同僚が声をかけた。

「おい、おい、鍋やきうどんか、いい匂いがするな。しかし、どうだ、一人で鍋を突つつくって
いうのも、何かなあ」

「昔を思い出したんだ。いやな自分を。」

「中身のない鍋なんかつまんねえ。誰も食わないぜ。」

同僚は、そう言って私の背中をたたくと、そのまま廊下に出て行った。

無音の休憩室に、鼻をすするような音だけが残った。

池

ちょうど夏祭りで、自宅前まで迎えに行き、出てきた浴衣姿のナツミは、出店などを見て回ると、池に行きたいと言い出した。やぶ蚊にさされるからやめたほうがいいと、いったが、のぼせちゃって。池にどうしても行きたいという。彼女は頑固なところがあるから、説得で成功したことは二三回だけだ。それも、危険で何が起こるか分からない寸前のところでようやく納得してくれたほどだった。神社から、大通りを抜け、公園を頭に浮かべ、かなり遠くなるよといった。うなずいて、ついてくる。

池の周囲を歩いて、ナツミは突然止まり、私の腕を引き、草むらになだれ込んだ。

「ねえ、こないだ行った秩父のお蕎麦屋さんまたいかない？」

「え、そんなところにいていないよ、いつ？」

ナツミは汗で乱れた髪を整えて、立ち上がった。無性に腹が立った。

「私が別の人と付き合っていたら怒る？なぐる？」

「わからない、まったくわからないんだ」

「そう、ごめんね、」

「いいんだ、ほんとうにいいんだ」

ナツミは泣いていた。

「家まで送るよ」

「ごめんなさい、私いつかひどい目に合う気がする、あなたを裏切ったんだもの、とても優しい人を」

ナツミは自宅前に倒れた植木鉢を気にすることなく、そして、振り向くことなく家に入った。

私はその晩、風呂場で、腕の表皮を包丁で切った。血が流れた。あかりの下で切り刻んだ数は3本あった。

冷蔵庫を開け、冷水を取り出し、一気にあおった。そして、布団の上で胡坐をかいて、もう、どうでもいいじゃないか、なんだっていいんだ、そう、どうでもいいことなんだ、そして、わたしは暗闇で微笑んだ。

旧友

昼の私鉄は静かで、畑が広がる郊外から私は都心に向かっていて。もう少しで、終点の新宿につくと思ったころ、ひとつ前の駅で、同級生のカナコさんが乗り込んで、向こうは覚えていたらしく、片手を上げ、手を振った。私は席を譲り、カナコさんに座っていいよ、といった。サンキュ。彼女はすっかりニキビは消え、きれいな女性になっていた。格好と化粧から、経済的に困ってはおらず、左手の指に結婚指輪をしていたので、生活は安定しているのがなんとなく伝わった。

「どこ行っていたの？」とカナコさんはたずねた。

「大学」

「へえ、学生さんか」

「ひでえな、大学の非常勤講師だよ、学生じゃないよ」

「言ってはいけないと思っていたんだけどね、」と彼女は含み笑いをして、「小学校の時バカで有名だったよね。」

「はい」

「人って変わるのね。うちの子供はゲームばかり、学校に行っていないんだ」

「どうかしたの？」

「いじめ」

「大学でもあるんだよ、いじめ」

「だけどさ、ひどくない？今のいじめってさ、殺すんだよ、最終的には」

「ああ、そこまで行くみたいだね」

カナコさんがちえっと舌を鳴らした。

「乗り込んで、殴っちゃったんだ。あたし」

「学校に？」

「そう。教室の全員、それで問題になってさ」

「旦那さんに話したの？」

「うん、無理なのよ、九州から駆け付けるのは」

「それは無理だ」

また舌打ちした。

「思い出すとイラつく。」

「何を」

「あの、気になるんだけど、尋問みたいだよ、その話し方」

「ああ、ごめん、ごめん」

「ああ、あなたって、私語が多たって叱られていたのに、口数少なくなったね」

「一人で教えていると、こんな風にコミュニケーションがとれなくなるみたいだ。学会でも発表して、討論とかしないからさ」

次は新宿というアナウンスが流れた。

私は窓越しにビル群を見ていた。霧の多い、小雨の降る空だった。英語のアナウンスが続いた。車内がざわつき始めた。

「乗り換えだ」

「新宿線？ひょっとして」

「うん」

「ま、いっか」

「別の車両に座るよ、何か嫌われているみたいだ」

「違うんだよ、昔覚えている？アキヤマ トオルって、友達」

急に私は逃げ出したくなった。「で？」

「乗り換えなくちゃ」

私とカナコさんは乗り換えた電車の中で出発するまで会話がなく、お互い記憶をまとめていたのかもしれない。

「トオルがどうした」

「これになっちゃってさ」こめかみのあたりで輪を書き、手を広げた。

「だって、そんなやつじゃなかったよ」

「みんな言っているよ、あんたが裏切ったからだって」

返す言葉もなかった。確かに裏切った。事情があった。小学生なりの事情が。トオルは頭もよく、成績は学年でもトップのほうだった。私は彼から教えてもらったりした。たいていは理解できないが、それを言うと、トオルは、けして見捨てずに、教えてくれた。私をばか扱いしなかった。たいがいはトオルの後を追うように遠回りだけれど、トオルの家で少し勉強を教わり、ファミコンでディグダグをした後、帰宅した。日曜日の昼すぎに、私はトオルの家に向かっていて。通りの横道がざわついていたので、見ると、3人ほどのクラスメートでないものがトオルの上着をカッターで引き裂き、抵抗し、怒りに震えるトオルを一人が羽交い絞めにしていた。トオルとぼくは目が合った。ぼくは怖くなって、本能的に逃げてしまったのだ。それからトオルは、卒業まで一切連絡を絶ち、学校に来なかった。いくら電話や手紙を送っても門前払いだった。18歳の時のクラス会に、出席したとき、トオルがMITに留学をした話が話題となった。その後、私は不快な出来事を味わい、クラス会には出席をしなかった。

「で、トオルはどうしたんだい」

「閉鎖病棟」

「なに、それ」

「非常勤講師でしょ、精神病院。一生出られないんだってさ。今は強い安定剤で、髪は真っ白、おむつをして、寝たきりだって。あなた歯磨いている？くさいよ、口」

「おれ、次の駅で降りるんだ」

「はい、はい、もう次見かけたときには、私無視するけど、悪く思わないでね、人ってさ、変わるからね」

どこをどう歩いたかは知らない。私は、自宅に戻り、自殺も考えた。次の日曜日に、トオルを見

舞いに行くため、連絡しようとしても、カナコさんの態度から、それは無理だと思った。名乗った途端に切られるのが落ちだからだ。

数週間後、封筒が届いた。差出人は清瀬神経病院とあった。封を切り、中身を取り出すと、手紙だった。すべて英語だった。私は目を通した。追伸に、見舞いに来てくれとあったが、横線で消してあった。封を開き、読み終えた手紙を入れようとする、引っかけり、中にもう一枚の紙があり、とりだした。

ヤマギワ シュウヘイさま

去る5月23日にアキヤマ トオル様はお亡くなりになりました。詳細は個人情報の保護のため、お知らせできません。アキヤマ様のパソコンの上に、一通旧友に渡してほしい旨の手紙が置かれておりました、ヤマギワ様へお送りいたしました。アキヤマ様のご親族のご意向のため、もしお受け取りできましたら、当病院までお知らせくださいませ。

その晩、何かから逃れるように、私は橋から身を投げた。

敗北

急成長著しいバーガートップがついに、大手ハンバーガーチェーンを抜いて、業界トップになった。郊外の小さなハンバーガー専門店からスタートをして、わずか4年。業界の頂点に立った社長の 深出 いずるさんに成功の秘訣をお伺いした。私は新聞をびりっと半分に破り、犬のトイレの下敷きにしてやった。いずれつぶしてやる。そう思い立つと、一本の電話が思い出され、震え上がってしまう。事の発端は、ハンバーガーを買いにバーガートップへと出かけたのだ。そして、店員が横柄で、「あ？聞こえない。あのね、これ、ビガーってやつ、Lって、通じないんだけど。なあ、」横文字に苦戦して矢先に言われ、その場は帰宅した。しかし、これはクレームに相当すると考え、一本の電話を本部に入れた。すると、数日後、一通の封筒が厚みを持って、届いた。バーガートップからの手紙であった。

いつもご利用ありがとうございます。お尋ねの件ですが、誠にお客様へご不快な思いをさせてしまったこととお詫び申し上げます。社員一同誠意に対応する所存でまいりますので、どうか温かく見守りくださいませ。同封しました粗品をお詫びのしるしとさせていただきます。

封を切ると、バーガートップの割引券であった。5枚入っていた。言動に関する調査もしないで、ここでシャットアウトかと思うと、腹立たしく思えてきて、電話をした。

——言動が問題だって言っているんですよ。客への対応でひとくくりでなく、スタッフの口の利き方がなっていないのを直さないのですか？問題でしょ。

——恐れ入ります、お客様、弊社は、個別に調査をし、懲罰を加える体制をとっておりません、詳しくは、誠にお手数ですが、ウェブサイトをご覧くださいませ。

——あのね、ふつう、

——恐れ入りますお客様、この電話は長時間の通話には対応しておりません、お手数ですが、ウ

ウェブサイトのお問い合わせのメールにてご回答させていただいております、誠に申し訳ありません、

私はあっけにとられて、電話を切った。そこで、消費者センターに連絡を入れた。すると、「それは個々の会社の姿勢だよ、別のところにサンドイッチ屋さんあるでしょ？そこへ行くとかできないの？」私は、たたきつけるように電話を切った。いったいなんていう体たらくだ！腐りきっている。私は家を出て、個人的な報復を考えたが、規範意識はまともなので、そういう際には、きちんとブレーキがかかるが、横っ面を張り倒したいくらいだ。すべて、隠ぺいで済ませようとしている。そんな折、テレビを見ていると、バーガートップの宣伝があり、それもゴールデンタイムに流す。巨額な利益を上げているに違いない。その分だと、政治家へ献金を送っていることだろう。私はめったに飲まないウイスキーを飲んで、布団にもぐった。腹のあたりがカーッと熱くなって、それと同時に、うとうとし始めた。

夢を見た。大きな塔を見上げていた。はるかかなたに人々はいる。塔に入りたいと門番に言った。組合に入らないと洋書は買えないんだ。組合ってなんだ？バーガートップのメンバーだ。起き上がると汗をかき、息が荒くなっていた。台所で冷水を飲み、着替え、卵を持って、深夜3時ごろだったろうか、バーガートップへと向かった。

深夜の闇にうっすらと街灯の光をあび、怯えきった感じがあるかと思っただが、建物は、そんなことでは動じない、と主張しているようで、ひねくれて生意気に見えた。そこで、私は卵5個を投げつけた。歩いて帰るとき、警察官に職務質問をされた。監視カメラから被害にあったことの通報が入っていたため、私は大変不利になった。

その後のことは、忘れたいくらいに個人と国家の力の違いを見せつけられた。この国家にとって、私のような個人をひねりつぶすのは、ダニを爪でつぶすみたいなものなのだと教え込まれた。判決を言い渡された時、私は幻覚を見た。法廷で、バーガートップの社長が法衣を着た裁判官に札束の山を渡し、検察側に多額の現金を渡し、弁護士にも現金を配っている幻覚であった。かなわないものには、逆らうな、私は刑務所に行ったとき、そんな言葉を思い出した。「あの、すみません、こういったことわざはどここの国のことわざでしょうかね」すると、囚人は苦笑いをし、目配せをし、「ああ、そんなね、教養っていうの？身に着けたって、意味ないぜ。なあ。」全員が笑った。「みんなね、疲れ切ってたよ、本当に、だから、明日の配膳で出てくる飯を考えるだけさ。」「それでいいのでしょうかね」「いいんじゃない？疲れてるんだからさ」私は何か大きな渦に巻き込まれまいとして必死にもがいていたのかもしれない。そんなことを諭された気がした。いいんだ、これで、本当に、戦うことは無意味なんだ、これでいいんだ。囚人と目が合った。皆微笑んでいた。私も微笑んだ。

群衆

私は郊外に用事があり、朝のラッシュ時に電車に乗った。さすがに、都心へ向かう混雑ぶりとは異なり、ゆとりのある車内であった。ただ、終着駅の際に、大量の人々がなだれ込んでゆく。入れ替えを仕切るのは、終着駅の駅員だ。私は、アナウンスを聞き、準備といっても、身構えるくらいである。先ほどから、運転席の仕切り窓をガンガンこぶしでたたき身なりがみすぼらしい、おそらく酒に酔い、片手に紙袋を下げ、髪が汚れで固まっている男が、だんだんエスカレーターをし、車内アナウンスで警告が流れた。男は、唾を窓に吐くと、後部車両へと移動した。私の前には仕立てのいいスーツを着た、年輩の男がいた。英字新聞を広げ、乗り換えるため鞆を開くと、急いで新聞を折り曲げ、中へ入れ、鞆を抱えた。皆、入れ替えの混雑で流されないために構えるのだった。終点のアナウンスとともに、速度が変化し、おそらく運転手の目には、カーブを描くプラットホームが飛び込んでいるはずだ。年輩の男は、腕時計を見て、心配そうな顔つきで出口を見ている。ホームが車窓を流れるように左から右へと錯覚ではあるが、移動すると紳士の表情は険しくなり、眉間にしわが寄った。立ち上がり、車内には数名しかいなかったが、出口付近まで急いだ。

空気を吐き出す音とともに、ドアが開いた。勝負だ。私は、体を硬直させたままひしめく群衆の中央を押し込んでいった。紳士は、鞆を盾にして、突入をしていった。そして、一瞬にして、入れ替えが終了した。

すると、駅員が紳士の肩をつかんで、「トラブルの元ですから、鞆は抱えるようにしてください、ご協力をお願いします」といった瞬間、紳士は胸ポケットからナイフを取り出し、駅員の首を一突きした。ナイフは頸動脈を割いたらしく、鮮血が噴出し、支柱と壁が血にまみれ、吹き出し続ける血液とともに、悲鳴の上がる中、駅員は次第に力を失い、急な血圧低下のため、ひざから崩れ始め、腰が抜け、倒れてしまった。

「いいから、救急車と警察を呼ぶんだ！」同僚の駅員が異常に気付き、駅員同士で連絡を取っているすきに、紳士は人並みに紛れ込んで消えた。私は、駅を飛び出し紳士を追いかけてみた。どこにもいなかった。裏切られたような気分からか、身なりに騙された自分の人を見る目のなさにいらだったため、警察に突き出してやろうという気分で追いかけたのだ。その際に、一人の男に肩が当たった。すると、男は、私の胸元をつかんで、釣り上げるよう力を込め、突き飛ばした。その男も人々の中に隠れた。私は毒をもったタコから、毒のある触手を伸ばしているような群衆を眺めた。今、現在、この国はいらだちと不信感で人々は疲弊し続けている。

代償

Gさま

あなたのことを私は花のように愛しています。もしかすると、旦那様よりずっとGさまのことを大切に思うと自負しています。私は、誓ったのです、一度個人的におわいできたら、命を捨ててもいい、海に投げ込まれてもいいと思うほどです。どうかこのあわれな私と一回だけでいいですから、一夜を共にして下さいますか。日付は従います。

Vより

Vさま

お誘いのこと、感謝いたします。もう、わたし、おばあさんなんですよ。そんな私を主人よりも愛してくださることは一生忘れません。しかし、お断りをせねばなりません。それは、わたしは結婚をし、子供もいる以前に、人を不幸にしてしまうからなのです。Vさま。最初にお見かけた時から、私はあなたのことが頭から消えなくなり、あなたを憎んだのです。ふしぎでしょ？憎めば、あなたは消えてくれると期待して、その反対に愛しているのです。消えてほしいくらいに好きなんです。12月の初めには自宅には誰もいません。でも、だめだわ、誰かが来ているかもしれません。リスクが大きすぎます。お互いのために、お会いしないほうがいいと思うの。ごめんなさい。こんなおばあさんを好いてくださって。

私は、返事を何度も繰り返し頭に入れた。それはG夫人を吸収するかのようであった。そして、その晩から、私は居ても立っても居られない気分になり、みだらな行為にふけ、ふしだらな空想に浸った。それらは、次第に、G夫人の暗黙の了承である12月初旬に来てほしいという願望を命を捨てても、いや、一生涯障害を負っても、お互い叶える、現実にする事の決意へと駆り立てた。

実行犯ではないと何度言い聞かせたか、そして、その一方で、これはお互い了解してからの行為であると思い家を出た。タクシーを拾い、私は何度も探ったG夫人の家に向かった。車庫にはいつものボルボはなく、家のあかりは消えていた。時刻は深夜3時だ。わたしは、G夫人の部屋を知っている。G夫人の子供がいて、その子供をてなづけて知ったからだ。「二階の階段を上がるんだよ、そして、右に部屋が一つあるの、そこが寝室、お父さんとママが寝るところ」ピッキングは、サイトで調べた。簡単にいかないことはない、別の家を何回か訪れて、実際に腕を磨いたのだ。二階に上がった時、扉が開きかかった。しばらく息を殺した。

「あなたね、待っていたの、いらっしやい」

私はベッドに倒れこんだ。しかし、緊張してか、委縮した。そのときG夫人は

「へ、へちまが縮んでやんの。そんなんで女を抱けるわけねえだろ、おわいできたら、」灯りをつけると、G夫人がベッドに全裸で大きく足を広げていた。「おわいできたら、文章書けねえの丸見え」私は、震えた。内臓が消え、頭から中身が消え、自分がそこにいること自体が無理だったのだろう、間隔が消え、倒れそうになった際、私から放たれた証をG夫人は大声で笑い、「わらえる。出ちゃうし」私は気絶をした上にG夫人は枕を投げつけた。

警察に通報をされた。

私は取り調べを受ける状態でないと判断がでたらしい。言葉が出ないのである。取調官は、かなり同情的であったし、一人が脅し役もう一人がといったことはなかった、言葉づかいも、きわめて労るように問いかけてくれたが、私は言葉を一切失った。そして、怒りも、泣くことも、考えることも失い、ベッドの中で積み木をいじり、止まらない涙を浮かべても、頭に流れるのは遠い昔の母の子守歌であった。その母が来ても、私は母と記憶の母とが結びつかなかった。そのうち、食事をとらなくなり、胃ろうを断る母か父は私の罪を赦してくださる所へ向かわせたほうがいい

いと考えたのだろう。今日も、一日積み木をいじくり、子守唄が頭に流れる。